

学校名	甲斐市立敷島中学校	教科等	理科 道徳科 国語科
研究主題	自ら考え、学び、行動する生徒の育成 ～「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指して～		

1. 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

①ICT を活用した学習者主体の授業づくり

- ・ ICT を授業で有効活用する方法の検討
- ・ ICT を活用した授業の一人一実践
- ・ 授業実践による研究（理科、道徳科、国語科）

②学びの基盤となる学級づくり

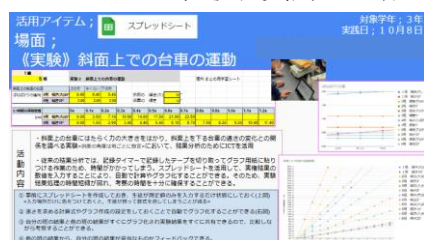
- ・ 総合質問紙調査による個人・学級集団の細かな見取りと指導計画
- ・ フリートークを全学級で実践
- ・ 生徒理解を深める理論研究

(2) 具体的な研究活動

① 都留文科大学の野中教授、山梨南中の齊藤先生による講義

→授業で ICT を活用する教職員の増加。

- ・ ICT を活用した授業の 1 人 1 実践については、Google スライド™を活用し、教職員間で共有した。



理科（第1学年）

単元名「身のまわりの現象」

音の性質について、多様な調べ方ができるように準備した。

波形を 1 人 1 台端末で記録した後、学習支援ソフトを活用し、学年全体の実験結果を共有し、結果を比較した上で、規則性を見いだした。



道徳科（第2学年）

教材名：「たすきとポンポン」 内容項目：相互理解・寛容

性別偏見に対して葛藤する登場人物から平等について考えた。

映像資料を活用し、教材から発展させた身近で具体的な場面を挙げ、どの課題について考えを深めたいかを生徒自身が選択した。



国語科（第3学年）

単元名「古典と今を生きる私たちのつながりを見つけよう」

古典に関する探究的な課題を自ら設定し、指導者のモデルを参考に、学習計画を立てた。

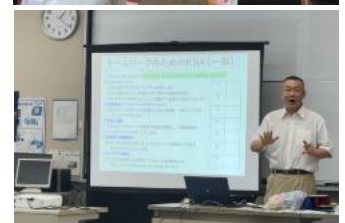
相互参照や中間評価により自己調整をしながら自ら学習を進めた。



- ②・質問項目への回答から学校や家庭における個人の様子を教師が細かく見取った。
学級集団の強みや改善すべき項目を、担任を含む数人の教職員で確認し、指導計画を立てた。
- ・全学級で短学活の時間にフリートークを実施。



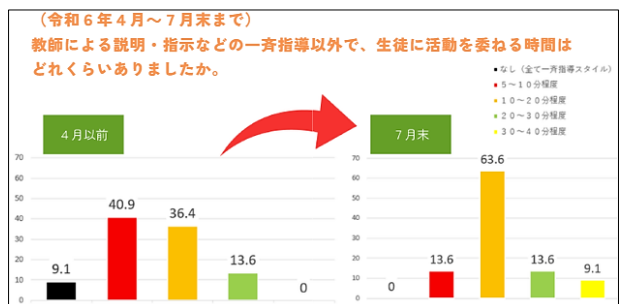
- ・教育実践家の菊池省三氏による師範授業及び講義
各学年への道徳の師範授業を、学年職員が参観。
個別最適な学びや協働的な学びの基盤となる、誰とでもつながれる、
話ができる学級づくりについて学んだ。
- ・山梨大学の吉井准教授による講義
特別な支援を要する生徒への指導法、ユニバーサルデザインの授業
づくりの手法について学んだ。
→全員が参加できる授業づくりに向けた取組につなげた。



2. 研究の成果と課題 (○成果 ▲課題)

- ①○授業における ICT の活用率が上昇した。
○授業だけではなく授業以外の教育活動にも活用されるようになったことにより、
教職員、生徒双方の ICT スキルが上がった。
- 生徒に活動を委ねる時間が増加した。
(教員アンケートより 図1 参照)
- ▲「個別最適な学び」「協働的な学び」への
研究を深めていく必要がある。
- ▲今年度は「生徒の選択肢を増やす」「他者との
意見交流」「ICT を活用した相互参照」に
留まった。主体的・対話的で深い学びにつ
ながる効果的な指導法を検討していく。

図 1



- ②○生徒理解が深まった。日頃から職員間で生徒や学級の情報を共有する時間が増えた。
○フリートークを通して交流の輪が広がることで、目的に応じた学びの方法として対話の相手につ
いても、適切に考えることができる生徒の様子がみられるようになった。
- ▲学級経営については各種調査等の結果の共有に加え、課題の改善方略についても教職員が共通
認識を持って取り組んでいくことで、更に安定した学級づくりができると考えられる。
- ③その他
○教職員の業務にも ICT が活用されるようになり、データの共有や共同編集を通して、教職員間
における協働が生まれた。

「子供主体の授業づくり」の事例について

【中学校・第1学年・理科・身のまわりの現象（音の性質）】
（選択の幅の拡張 学年の生徒全員で共有）

1 本事例のポイント

- ・生徒が誰とどのように学ぶか選択できるような場面を設定し、音の記録ができるよう複数の記録場所を設定した。
- ・学習支援ソフトを活用し、学年全員の実験結果を相互参照し、結果の妥当性を高められるようにした。

2 本事例の概要

〈個別最適な学び〉

- ・どの楽器を使って調べるか選択できる場面を取り入れた。
- ・誰と学習を進めるのか選択できるようにした。
→授業を受け身ではなく、「自分で解決しよう」とし、納得できるまで粘り強く学習に取り組めた。

〈協働的な学び〉

- ・学習支援ソフトにより学年全員の実験結果を見られるようにした。
→授業時間内に、全ての楽器について調べることはできないが、仲間の実験結果を見ることができるため、様々な楽器の実験結果を比較することによって、より科学的な見方が養われた。



3 成果と課題

- 学年全員での記録共有することで多くのデータから規則性を見いだしていた。
- 音を出す役、記録する役と、それぞれの生徒が自主性を持って取り組めた。
- ▲時間の関係で難しいが、予想した内容の根拠を話し合う時間を確保することで、より結果の妥当性を高めることができる。
- ▲個人で考えをまとめる前に他者の考えを見ることができてしまうのは、思考の妨げとなってしまうこともある。

「子供主体の授業づくり」の事例について

【中学校・第2学年・道徳科・たすきとポンポン（内容項目：相互理解・寛容）】
（考え、深める課題を生徒自らが選択）

1 本事例のポイント

- ・映像資料を活用し、教材から発展させた具体的な場面を挙げた。
- ・複数設定した課題の中から深めたいものを生徒自らが選択できるようにした。

2 本事例の概要

【導入】

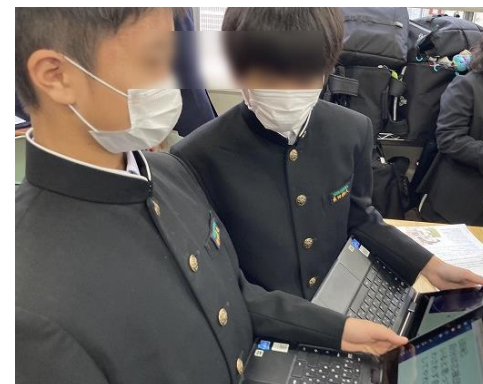
映像資料で関心をもたせる。対話形式。自我関与させながら教材につなげる。

【展開】

1人1台端末を活用し発問に対する自分の立場の違いを画面上のカードの色で表現。映像資料を再活用し、複数の課題を挙げ、生徒は其中から選択。同じ課題、異なる課題を選択した生徒との意見交流を通して、考えを深化。

【終末】

「望ましい人間関係」について考えた本時の流れを想起させ、自分事となった内容や日常生活につながる振り返りになるよう支援。



3 成果と課題

- 課題を自ら選択できたことにより、自分事として捉えやすくなっていた。
- 交流を通して異なる立場の意見を聞き、多面的・多角的に考えを深めることができた。
- ▲課題選択に際して、選ぶことに悩んでしまい、考えを深める時間が少なくなってしまった生徒がいた。
生徒が支援を必要としているのかを教師が判断し適切な支援ができるような見取りが必要である。

「子供主体の授業づくり」の事例について

【中学校・第3学年・国語科・古典と今を生きる私たちのつながりを見つけよう】 (相互参照と自己調整により自走する学びへ)

1 本事例のポイント

- ・探究課題と学習を進めるために誰とどのような方法で学ぶかを生徒自らが決定。
- ・レポートのモデルを示した上で相互参照を可能とし、自己調整の時間を設定。



2 本事例の概要

第1時 学習の見通しをもつ「おくのほそ道」の概要を知る。

第2・3時

冒頭・平泉の段から古典の読み取り方を学ぶ。

(指導者による学習モデル)

自身の探究課題を立てる。

第4時 課題について、自ら考えた方法で学習を進める。

(レポートのモデルを示し、自己調整を促進)

第5時 相互参照を生かして学習を更に進める。

第6時 探究を基に共通のテーマである「古典と今を生きる私たちのつながり」について考えをまとめる。
他者と交流し、考えを広げ深める。

『夏草—「おくのほそ道」から』松尾芭蕉

【テーマ】古典と今を生きる私たちのつながりを見つけよう。

【目標】古典を読んで考えを広げたり深めたりして、人間、社会、自然などについて、自分の意見をもつ。

Google Earth

○探究課題…平泉の歴史から松尾芭蕉が感じたことを読み取る

○学習方法…誰と？ 同様な探究課題の人や松尾芭蕉の性格、人生を読み取ろうとしている人
どのようなツールを使って？

インターネットや友達と情報交換 移動図書

○芭蕉の「旅」を知り、興味をもったこと
なんでも方ではなく、東北の方といったか、京都や奈良などの歴史や文化があることではなく、芭蕉の旅の北にたつたのか、旅に出るときはどのような心でどのようなことをしたいと思っていたのか

○「平泉」に興味をもったこと
なぜ平泉やその歴史を知ったのか、もともと興味があったのか、知っていたのかということ、芭蕉の旅やその神の神話などは必要だったのかということ

○探究課題に対する振り返り
11世紀末に奥州前田郡に平泉が築かれた。1124年には金色堂が建てられた。その後の平泉の歴史、芭蕉、芭蕉まで関心はあった。しかし芭蕉が旅手になると芭蕉の歴史に詳しくないという意識を自分自身で感じ、5ヶ月後に減らした。
○芭蕉の言葉、内容
芭蕉は奥州平泉で生まれ、平泉の歴史や文化を調べ、芭蕉ではどうなっているのかまで調べられるようにしたい

探究レポート用リンク

<https://padlet.com/mmmmmmmmm666/padlet-gokubzpch3g0yvp9>



古典と今を生きる私たちのつながり
松尾芭蕉と元禄文化の関係を調べると、元禄文化の時代は平和で一般庶民の生活にもゆとりが出てきたことで学問が発達し、松尾芭蕉のような俳諧師が出てきたこと
ここから考える「今を生きる私達のつながり」は平和な時代には文化が発達し、生活も安定するための心の拠り所となる芸術を探究する心情が生まれるということ(昔は言葉で芸術を表現していたが現代ではコーチャップやインスタなどで景色を画像や動画で表し、心の安らぎとする人も多から

これからどう生かされるか
松尾芭蕉の「おくのほそ道」を読み、平泉の情景を読んでみてこれから読書をする際にはないものを言葉にして表している部分の言葉の意味を調べてどのようなことを筆者が書きたいのかを読み取り、心情表現を豊かにしたい。古典文学は筆墨の表現で表すのではなく、簡潔な表現が多いと思うので、これから有名な古典文学を読むときには言葉の裏にどんな意味が隠されているのかまで読み取って作者がその景色を見たときと同じような心情を抱けるようにしたい。奥の細道は松尾芭蕉の旅の記録だが、自分も素晴らしい景色を見たり、心にくるものがあつたら心でもいかに言葉にして書き留められるようにしたい

3 成果と課題

- 自ら決めた課題と方法で、指導者の支援を得ながら、主体的に学習を進めることができた。
- 毎時間の振り返りを通して、生徒は“学び方”をメタ認知することができた。
- ▲相互参照でレポートを見ることはできていたが、考えを直接聞きに行く生徒は少なかった。授業者による働きかけでそのような機会を増やせるよう工夫したい。